

令和3年度版

内容解説資料

NEW CROWN

 English Series

教師用指導書
Teacher's Manual

評価資料

中学校英語—新しい評価はどうなる？

今井 裕之 (関西大学)

- はじめに
- 新しい評価の考え方
- 観点① 知識・技能
- 観点② 思考・判断・表現
- 観点③ 主体的に学習に取り組む態度
- 評価方法

三省堂



中学校英語—新しい評価はどうか？

今井 裕之（関西大学）



はじめに

新学習指導要領では、「教育目標」、「指導内容・方法」、「評価方法」について大きな改訂がなされた。それを受けて新しい教科書は、現行版に比べると到達目標をより高く設定したものに変わる。教育目標や到達目標が変わり、教科書や評価方法が変わり、さらに小学校で英語が教科化され、小学校英語の土台がより強固になりつつある。わたしたち教師は新たな目標、教科書、生徒たちに対してどのように自分の仕事を新しくしていけばよいのだろうか。

新学習指導要領の掲げる目標やその指導・評価方法を理解することで、生徒と教師が共に向かう目標（ゴール）を共有し、学びに向かうための教材・評価法（ツール）を手に入れ、そのゴールとツールを携えながら、生徒と教師それぞれが果たす役割（ロール）や学び方（ルール）を生み出せたなら、新しい主体的な学びの場を作ることができるのではないだろうか。

新しい評価の考え方

学習指導要領に示された「3つの柱」

学習指導要領では全教科を通して育成すべき教育目標として「**資質・能力の3つの柱**」を立てた。3つの柱は、学校教育法の「学力の3要素」や国内外のカリキュラム研究の成果を踏まえて、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性」とされている。

「学力の3要素」は、学校教育法第三十条第二項（2019年改正）に示されている。

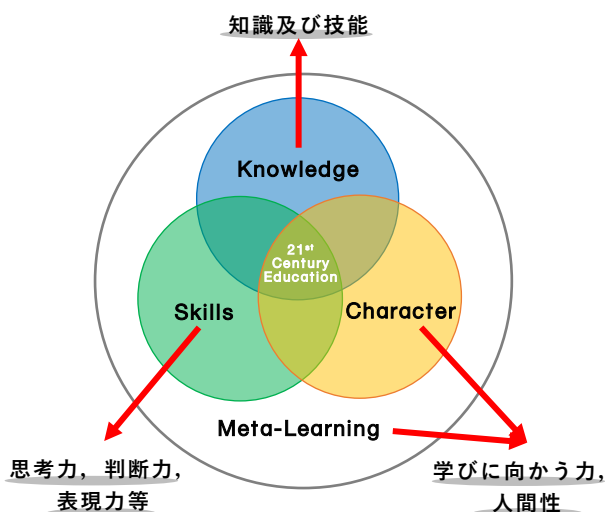
…生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

では、なぜ学校教育法では「主体的に学習に取り組む態度」なのに、新学習指導要領の「資質・能力の3つの柱」では「学びに向かう力、人間性」となっているのか？ それは、2015年から始まったOECDによるEducation 2030プロジェクト、Center for Curriculum Redesign（以下、CCR）の

Four-Dimensional Education 等の育成すべきコンピテンシーの議論に日本も参加しており、それを参照して学習指導要領改訂を行ったからである。

CCRが提示するフレームワークの4要素は、1) Knowledge, 2) Skills, 3) Character, 4) Meta-Learning である。これらが学習指導要領では、Character と Meta-Learning を統合して、図①のように整理された。

【図①：CCRのフレームワークと「3つの柱」】



このフレームワークを資質・能力の3つの柱に落し込んだことの意義は2つ考えられる。

ひとつは、**目標の拡大**である。このフレームワークで「外国語」は、数学・理科・社会等とともに Knowledge に含まれている。Skills は「創造性」「批判的思考」「多様性を受け入れて協働すること」「適切な表現」などの「思考力、判断力、表現力等」にあたる。これが意味するところは大きい。このフレームワークを各教科で育成すべき資質・能力と考えるならば、外国語の知識・技能を身につけるだけでは、外国語科の教育目標を達成できなかったことにならないからである。外国語の知識・技

現行の評価枠との違い—4観点から3観点へ

現行の学習状況の評価においても「観点別学習状況評価」「総括的な評定」による目標準拠評価を行っている点は共通であるが、その観点は4つである。今回の改訂で、目標準拠評価をさらに推進し、教育目標と指導内容、評価方法の一体化を図るために、**小中高の全教科で3観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」**に整理された。(表①参照)

新学習指導要領の評価方法がこのように変わったのは、学校教育法や現行の評価の取り組みを踏まえつつも、Education 2030 プロジェクトの提案を改訂に取り入れたことも要因として大きい。それにより、資質・能力の3つの柱の関係性・具体性が高まるとともに、一体的な指導の重要性が強調され、自己調整しながら粘り強く学ぶことの意義が示された。

新旧比較して一目でわかる違いは、「知識」「技能」が統合された点である。単に統合しただけで

能を活用し、創造的・批判的に思考し、他者と協働しながら外国語で適切に表現すること、つまり「英語で何かができること(=CAN-DO)」が到達目標になるというわけである。

2つ目の意義は「**メタ学習**」の重要性である。CCR の提案では、Meta-Learning は4つ目の要素であるが、学習指導要領では「学びに向かう力、人間性」として3番目の要素にまとめられている。自己省察・調整を行いながら「学び方を学ぶ(=learning to learn)」ことで、生涯学び続ける人を育成することが目標に掲げられ、それを評価することが示された意義は大きいだろう。

はなく、今後は「**生きて働く知識・技能**」として指導・評価することになる。

また、「**主体的**」であって「**積極的**」ではない点も重要だろう。「主体的」とは、自分に合った方法を考え、調整しながら学習し、他者や社会に関わろうとする態度である。これまでと評価の方法が異なる点に注意したい。

【表①：評価の観点（新旧）】

旧・評価の観点		新・評価の観点
知識・理解	→	知識・技能
技能		
思考・判断・表現		思考・判断・表現
関心・意欲・態度		主体的に学習に取り組む態度

感性・思いやり

Point 生きて働く知識・技能

外国語の「知識・技能」は、「思考・判断・表現」するために生きて働く知識・技能として関係づけられた。つまり、社会や他者と関わるコミュニケーションの目的や場面、状況に合わせて、理解・表現するための知識・技能という考え方である。

例えば現在進行形であれば、「be + -ing」という形式だけではなく、「状況や行動を描写して伝える」際に用いることができることまでを意味する。

Point 感性や思いやり

「学びに向かう力、人間性等」が含む「感性や思いやり」など観点別評価に馴染まない人間性の部分は評定対象とせず、「主体的に学習に取り組む態度」のみを評価する。これは、「自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価すること」を主眼とするという中央教育審議会答申を踏まえてのことである。

観点① 知識・技能

何を評価するか

外国語科における「知識・技能」とは、音声、語彙、表現、文法、言葉の働きなどを理解していること（＝知識）、それらを課題や状況に合わせて、聞いたり、読んだり、話したり、書いたりできること（＝技能）を意味する。

どのように評価するか

文法項目として「現在進行形」を例に挙げると、「現在進行形の特徴や決まりを理解している」ことが知識、「身近な生活や事柄についてその場で起こっていることを、現在進行形や簡単な語句を用いて文で書く技能を身につけている」ことが「書くこと」の技能の規準となる。つまり、場面・状況を踏まえて、書く内容にあった文法や語句の知識を活用して表現する技能を評価することになる。知識・技能でも、その文を使う場面・状況の設定が必要である点に注意が必要だ。

ただ、その制約（場面・状況を踏まえた言語使用とすること）を、全ての知識・技能に当てはめるのは難しいだろう。語彙にせよ文法にせよ、知識は特定の技能に限定されるものとは必ずしも言えない。むしろどの技能にも共通する知識と考えることもできる。それゆえ、例えば現在進行形についても、すべての領域で技能の評価課題を設けてテストをする必要はないだろう。

すべての領域で評価しないとなれば、どの領域で技能を評価するかという点がポイントになる。

新学習指導要領では語彙が増加し、仮定法などの新しい文法事項も導入され、知識の比重が高いと思われるだろう。しかしそのどれも、前述のとおり、理解しているかだけではなく、表現できることも併せて評価することが求められる。

例えば、受容技能と発表技能では、評価課題の難易度が異なるため、言語材料の特性や定着度を踏まえて領域を選択する必要があるだろう。同時に、評価する領域によって語彙の選択を変えたり、評価課題の難易度を下げたりするなど配慮したい。

Point 思考・判断・表現と併せて評価する

後述する「思考・判断・表現」をパフォーマンステストなどで評価するとき、文法や語彙を正確に理解・使用していること、理解可能な発音で言えていることを確認できれば、その「知識・技能」を評価することができる。

ただ、「思考・判断・表現」の評価課題では特定の文法項目等の「知識・技能」を狙い撃ちするわけではないので、それらについてはペーパーテスト等で評価することができるだろう。その場合も、リスト暗記的なテストではなく、使用場面や状況を想起して正解を選択するようなテストが望ましい。

例 NEW CROWN 1年 Lesson 5 GET Part 1

言語項目：現在進行形 領域：書くこと

評価規準：

知識	技能
現在進行形（肯定文）の特徴やきまりに関する事項を理解している。	世界の中学生について、現在進行形（肯定文）などを用いて、何時に何をしているかを正確に書く技能を身につけている。

評価方法：＜現在進行形（肯定文）＞を含む文を使って、絵で示された人物が、何時に何をしているか書かせ、その出来を評価する。

評価タスク：（1年 p.85 GET Speak & Write を応用）

①～③の絵を使い、日本の中学生が何時に何をしているか、海外の中学生に説明する文を書こう。

① 10:10



② 12:45



③ 15:30



評価規準：

A：8割以上が正解／B：5割以上が正解／
C：正解が5割に満たない

観点② 思考・判断・表現

何を評価するか

外国語科における「思考・判断・表現」の評価は、目的や場面、状況を設定した言語運用課題を通して、日常的・社会的な話題・内容について理解し、他者と自分の考えなどを表現しあうことがどの程度うまくできるかを評価する。「知識・技能」

どのように評価するか

パフォーマンステストを行う前に、まず「思考・判断・表現」の評価規準を決める。その際、以下のような形で、パフォーマンステストの目的や話題を明確にする。(詳しくは、国立教育政策所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』を参照)

【コミュニケーションの目的】のために、
【話題（何について）】について、
【内容・タスク（何をするのか）】を含む課題について【領域別の目標】ができる。

この評価規準に基づき評価課題を考える。何人で？時間は？準備はさせる？メモを見てもよい？など、タスク遂行の条件を決めておくことも大切だ。そして、評価課題と同時にループリックを作成する。「思考・判断・表現」の課題ではあるが、同時に「知識・技能」「主体的に学習に取り組む態度」も評価できるように基準を立てて、一覧表を作成する。可能であれば、A～C基準のベンチマークを作成する（時間がなければBだけでも！）。

例 NEW CROWN 1年 Lesson 5 USE Write

言語項目：現在進行形 領域：書くこと

評価規準：

思考・判断・表現
アメリカの中学生からのメールに応じて、日本の学校生活や行事について、写真を用いて紹介することを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができる。

評価方法：

写真を用いて、日本の学校生活について紹介する文を書かせて、その出来を評価する。

が言語面の評価だとしたら、「思考・判断・表現」は内容や課題の遂行面の評価と考えられる。課題遂行＝パフォーマンスであり、CAN-DOに基づくパフォーマンステストを用いて評価する。

この評価規準に基づいた評価課題、評価のためのループリック、評価基準の典型例となるようなベンチマークを評価者間で共有することが大切だ（できれば生徒とも）。生徒と教師が同じ学習・評価のツールを共有するのである。そうすることで、生徒は自分のパフォーマンスを上げるための目標や方法を知り、教師は生徒のパフォーマンスを評価しながら必要な指導や支援の方法を知ることができる。

Point 5 領域を網羅する

「知識・技能」については領域を問わない知識があり、必ずしも全技能で評価する必要がないと述べたが、「思考・判断・表現」については、5領域全てに評価課題が必要となるだろう。「思考・判断・表現」の評価課題は、同時に「知識・技能」「主体的に学習に取り組む態度」を評価することができるため効率がよく、実施する価値がある。逆に、「知識・技能」のテストで「思考・判断・表現」は評価できないため、それだけで学期を終えてしまったら大変である。

評価タスク：（1年 pp.90-91 USE Write を応用）

写真を1つ選んで、日本での学校生活や行事について紹介する英文を書こう。

B 評価の例：

School Uniform

Here is picture of our uniform. Students are wearing same shoes, too. We wear every day. In our school, girls can choose skirt or pants. I like our uniform very much.

観点③ 主体的に学習に取り組

「主体的に学習に取り組む態度」を説明する際に、「関心・意欲・態度」との違いが必ず話題に上がる。中央教育審議会答申によると、基本的にどちらも同じ趣旨だが、「関心・意欲・態度」が挙手の回数、ノート提出などで評価される傾向があり、それを改めたかったと述べられている。

加えて Education 2030 プロジェクトの影響もあり、「主体的に学習に取り組む態度」は、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の学習活動への「粘り強い取り組み」の側面と、粘り強さを発揮するにあたり「自らの学習を調整しようとする」側面が互いに関わり合うものとして捉えられている。

「粘り強い取り組み」は、前項のフレームワークの人間性（態度、主体性、情意、マインドセット、価値観等を包含する概念）から浮かび上がったキーワードと推察される。一方、「自己調整」もこのフレームワークの「メタ学習」を踏まえた概念で、成長志向のマインドセットを持ちながら、自身の

学習過程や結果を省察し、調整していくことを意味する。

「粘り強く」「自己調整」している生徒たちをどんな場面でどのように評価するのか？ 「知識・技能」「思考・判断・表現」に係る学習への粘り強い取り組みと自己調整なので、単元末の言語活動終了時、パフォーマンステスト時などに、「振り返り」を行うのが一般的と言えるだろう。

Point なぜ評価に「振り返り」が必要？

新学習指導要領に、外国語科で「思考力、判断力、表現力等」を育成する学習過程として、①コミュニケーションの目的や場面、状況等を理解する、②目的に応じてコミュニケーションの方向性、見通しを立てる、③具体的なコミュニケーションを行う、④言語面・内容面で自ら学習のまとめと振り返りを行うことが示された。「振り返り」が指導と評価の重要な要素であることが窺われる。

評価方法

評価方法の選択

それぞれの観点を適切に評価するためには、評価のポイント（表②）を踏まえた評価方法を、教師が身につけて活用する必要があるだろう。評価方法は、少なくとも「ペーパーテスト」「パフォーマンステスト（聞き取りテスト、作文テストを含む）」「振り返りシート」の3つが考えられる。この3つの評価方法を駆使することが今後の課題である。

「知識・技能」は主にペーパーテストを用いるが、前述のように発表技能（話すこと・書くこと）は、パフォーマンステストの中で測ることもできる。また、受容技能（聞くこと・読むこと）は、「思考・判断・表現」も筆記テストの一部として行うことが考えられる。領域によって評価方法が変わることに留意したい。

「思考・判断・表現」はパフォーマンステストを用いる。これは必ず行う必要がある。なぜならパフォーマンステストは、「思考・判断・表現」と

同時に「知識・技能」も評価できるし、言語活動の粘り強い取り組みの証と理解すれば、「主体的に学習に取り組む態度」の評価も可能だからである。パフォーマンステストというツールのノウハウを同僚とともに開発・改善することで、到達目標（ゴール）や評価規準、評価基準の共有がよりスムーズになり、互いに協働しながらロールやルールを定めることができる。2020年はそんな職場づくりの準備期間かもしれない。

「主体的に学習に取り組む態度」は振り返りシートを用いる。その具体は次頁を参照されたい。

【表②：評価の観点とポイント】

評価の観点	評価のポイント
知識・技能	生きて働く知識・技能
思考・判断・表現	目的・場面、状況に合った言語運用
主体的に学習に取り組む態度	粘り強さ、自己調整

「振り返り」の役割

省察（Reflection）には、2つの役割がある。

- ①言語活動等で体験的に学んだ言語面の気づきを言語化する役割
- ②自分の学習過程や成果を見直すメタ認知を高め、自己調整を促す役割

しかし、現状中学校現場で行われている「振り返り」は、妥当で信頼できる評価だろうか。「生徒の主観だし、生徒間の意識差が大きく評価に使えない…」というのが一般的な「振り返り」に対する認識で、そもそも「振り返り」を授業で実施していない学校も多い。小学校では振り返りシート等を継続的に書いたり、授業の最後に口頭で振り返りの時間を設けたりして省察を促す機会が多いが、中学校では上記の一般認識もあり、「振り返るくらいなら前に進む」先生の方がむしろ多いのではないか。

前に進む前に少し立ち止まって欲しい。あてにならない「振り返り」を適切なものに改善すれば、**体験的な学びを深め、主体的な学習を促す指導と評価のツール**になると考えたい。また、生徒たちが自分自身、同級生、先生にかけける声を、教師が聞いたり読んだりする機会になる。それにフィードバックを返すことで互いの意思疎通が高まり、学習活動に対する認識が共有できる。

そのために、前述の①と②に関する、省察を促す以下のような質問を生徒に考えさせて「振り返り」を促そう。

- 1) 今回の言語活動でうまくできたと思えたことは何ですが？
- 2) うまくできるようになるためにどんな工夫をしましたか？
- 3) うまく伝えられなかった、理解できなかったことはありますか？

言語面・内容面の気づき

学習上の自己調整

パフォーマンス向上のための課題発見

このような振り返りを行うことで、1)の振り返りをより確かにするために、教師の評価をフィードバックしたり、2)に対しては、より良い学習方略のアドバイスを行ったり、3)に基づいて、再度課題にトライして改善する機会を与えたりするなど、**生徒の記述をその後の指導ツールとして活用**することもできる。

また、主体性の評価の際に、生徒の振り返りの記述だけでは不十分だと考えるなら、振り返りの内容が普段の授業での行動に具現化されているかなどを実際に確認できれば、主体性、自己調整については「C ではない」と判断する十分な根拠になるだろう。ぜひ生徒と教師をつなぐツールとして振り返りシート等を活用したい。

NEW CROWN 振り返りシート（見本）

どの単位でも使える領域別の「振り返りシート」です。

- ☑ 振り返りのポイントは、生徒に理解しやすいことばで提示
- ☑ 達成度は「☆」を塗りつぶす形で確認
- ☑ データは、「ことまな学校サポートサイト」で公開予定

参考文献

OECD (2018). The Future of Education and Skills: Education 2030. <http://www.oecd.org/education/2030-project/>
CCR (2015). Four Dimensional Education: The Competencies Learners Need to Succeed. Lightning source Inc.
国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』



この資料の内容に加え、さまざまな情報を掲載しております。

- ▷ 編修趣意書
- ▷ 指導・学習内容一覧
- ▷ 小中連携資料
- ▷ デジタル教科書（教材）の体験サイト

など

Lesson 5 Reflection Sheet



Read

Class: _____ No: _____ Name: _____

Date: _____

Check Point	達成度	理由・感想など
わからない部分があっても、最後まで読み、概要が理解できた	☆☆☆☆☆	
読んだことについて大事な点がわかった	☆☆☆☆☆	
読んだことについて自分の考えを持つことができた	☆☆☆☆☆	
わからない時にわかった事から予測したり何度も繰り返し読んだりした	☆☆☆☆☆	
読んだことについて友達と話したり質問したりした	☆☆☆☆☆	

できるようになったこと

次までにがんばりたいこと



Write

Class: _____ No: _____ Name: _____

Date: _____

Check Point	達成度	理由・感想など
読み手や伝える目的を考えた	☆☆☆☆☆	
書きたいことを整理して書けた	☆☆☆☆☆	
綴りや文法など表現に気をつけて書いた	☆☆☆☆☆	
表現がわからない時に、辞書や教科書を参考にした	☆☆☆☆☆	
伝えたいことを十分に書くことができた	☆☆☆☆☆	

できるようになったこと

次までにがんばりたいこと

<https://tb.sanseido-publ.co.jp/03ncpr/>

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町 2-22-14 TEL 03-3230-9411（編集）・03-3230-9412（営業）
大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地 2-5-3 TEL 06-6341-2177
名古屋支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内 3-21-31 協和丸の内ビル 2F TEL 052-953-9211
九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1 TEL 092-531-1531
札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15 ビル 3F TEL 011-616-8722